

Rurikarakusa 29 email newsletter

Guest Naoya Miyata

Yuki Hanamuguri

Rieko Kusano

Yumiko Aoki



◆後期高齢者になり感じたことは、本当にやっておきたいことと目的を絞って、生活のダウンサイジングを図る必要があるということ。明日死ぬかもわからない」ということを承知の上で今日を送り、明日を待つということ。会いたい人に会っておく、見たいものを見ておく、読みたい本を読んでもおく、書きたいものを書いておくことです。今年はず右の銘を「ていねいに生きる、慎ましく生きる、しかし憧れだけには忘れない」としました。これは先の「したいことをしておく」事とは少し矛盾します。それ故、なにが余分であるかを、激しく見極めねばなりません。もしも余分なことに気づいたら、詩の推敲のように等身大まで削ります。(花潜 幸)

◆高齢の母が誤嚥性肺炎と尿路感染症で入院した。せん妄も出ているらしい。医者の見立てはよくないらしいと姉から電話が来た。姉は脳梗塞などを患っている。障害のある次男を夫と長男に託し面会に行くことにした。数日前に離れて暮らす長女から高熱を出したと連絡が来た。出発の前々日には次男に血尿が出た。膀胱炎がぶり返したようだ。私は自分の周りの人たちの心配を思う存分したい。世界の国のトップとされている人たち、どうか世界中の人たちの悲しみを、痛みを、苦しみを心配させないでください。母は前日のことは忘れ、毎日「遠くからよく来てくれた」と喜んでくれた。(草野 理恵子)

◆Rurikarakusa 29号のゲストは宮田直哉さん。若いのに不思議な落ち着きがあり、歩み続ける清新な意欲に満ちています。近代詩に深く学び、その精神性を現代詩に引継ぎ発展させたという詩誌「カナリア」編集長であり、「Nox」の発行人でもあります。感受という現象そのものを見つめた作品と、現代の黙示録のような作品を寄稿して下さいました。深謝。◆恫喝(嘘)で他者を支配しようとする為政者が「嘘」を重ねた果てに、己の嘘に支配されて「実行」させられる前に。アメリカを作り上げて来た人々の良心が、彼を引き留めて呉れますように。(青木 由弥子)

※お便りのような詩誌をお届けしたい、という思いで創刊した本誌ですが、Eメールでいただく方が保管しやすい、という御意見も以前から頂いておりました。、ニュースレター版も作成してみました。内容は紙媒体と同一です。

Rurikarakusa 同人3人の頭文字 花 草 青 にちなみ、和名「瑠璃唐草」より誌名を得ました。洋名 Nemophila は、ギリシア語で小さな森を愛するの意。小さな森の陽だまりを好む、青空の欠片のような可憐な小花です。年3回発行の予定。

(2016年1月創刊)

発行日 2026年5月20日

発行人 〒146-0085 東京都大田区久が原

2-7-15

青木由弥子

Mail : poetess21@gmail.com

現代の神話

原風景

宮田直哉

ヘリオトロープの匂いが私の脳髓を刺激した。

鼻腔からのびやかに入り込み、動脈の中をさらさらとめぐりめぐって、中枢神経へと行き渡ったのだ。

あらゆる細胞の中に過保護的に植え付けられ、気がつけば数えきれないほど増殖している。

あたかも中毒のように私はくらくらとめまいを起す。

じっとしているとあちらこちらから芽生えはじめてきては成長し庭をつくった。潜んでいたたくさん生き物たちが散歩をしにくる。

さながら私は生きた標本である。

彼らは結託して私を居心地のいい棲み家にしようとしていた。

私が反応せられたのは彼らが匂いによって何か思慕のような懐旧に触れたからに違いない。

私はしばらく彼らのなすがままにさせていた。

けれども私にも言い知れない懐かしさのようなものが芽生えはじめた時、ふと私自身が彼らのなすがままにされているのかも知れないと気づかされた。

いつまでもとどまることなく増え続けた。やがて小さな村ができた。みなそれぞれの望郷を交錯しながら。

私達を通った門は、

静かに内部の熱を上げていった。

発火点に達すると、

俄かに赤く囲まれた。

幾日も燃え続けた後、

空という概念が滅却されていた。

無風と強風とが

繰り返し渦巻いたかと思えば、

またいたるところから

幾日も雨を降らせた。

錆びついて跡が残った。

黒い微粒子がまつわりついた。

忘失も喪失もその上に、

有機物を塗りつけられていった。

造形物は排除され続け、

地上の定義は曖昧にされた。

荒野から新たに構成されつつあるものの下で

わずかに呼吸音が感ぜられた。

呼吸音はやがて声になった。

声は言葉を内包しつつあった。

それらは小さな祈りの原初になった。

ふたたびと振り返りみれば

私達を通った門は、

暗い天体となって中空に浮かんでいた。

純真な姿態をさらけ出し、

悲しそうに笑みを浮かべた。

【エッセイ】

高原だより

「何もかもがまだ芽吹く前で眠ったままだ。けれどその眠りも深い眠りというわけだなしになにかもう目覚める前のまどろみのようなそういう春の訪れを感じるともなしに感じる……」

軽井沢に行っている友人からそんな書き出しの絵葉書が届いた。

毎年私はその友人と軽井沢に行っていたが、子供が生まれたりして慌ただしく過ごしていた為に昨年はどうとう行かれなかった。どうやら彼は我慢できなくなつてそんな季節はずれの三月に一人高原へ行ったに違いない。いつも私たちはメインストリートの奥にあるつるやに泊まっていたが、今回彼は違うところにいるようである。きっと私たちがいつだったか森の中を散歩していて、知らないところをずんずんと歩いてゆくものだから、もうほとんど迷いかけていた時に不意に現れた、絵本かなにかに出てきそうなあのヒュッテにでもいるのかもしれない。

彼が一人あのヒュッテで静かに春を待ちつつ暮らしている、そんなことを想像しながら私はあのどこかなつかしくて親しみ深い高原の村の至る所を思い出していた。二十歳の時から毎年訪れている村だが、三月だけはまだ滞在したことはなかった。私はいつだったかつるやに置いてある花図鑑に、「ユキノシタ」という可憐な名前を持った花が載っていたことを思い出す。三月ともなるとようやくその花を咲かせようともうほとんどそこまで来ている春を感じ取って、朝を迎えるときの子供のように胸を高鳴らせているのだろうか。それともその名前のようにまだ残雪の下でその小さな体を横たえているのだろうか。そのどちらでもいい。私は絵葉書からかすかに漂ってくるまだ冷え冷えとした高原の空気を思う存分吸った。……

宮田直哉（みやた・なおや）

一九九一年、福岡県生まれ。詩集に『夏の物語と歌』、『ある風景』（第三十八回福田正夫賞）。

春は名のみ冷たい朝
 散歩で森の手前の公園に寄ると
 こぶしがつぼみを
 青空に堅く立てている
 若い妖精たちの
 こころざしのよう

砂地の広場の端には
 茶色いボールが転がっている
 昨夜、落ちた惑星であれば
 中はまだ暖かいはず
 どのように子どもの想いは
 燃えているのか

風に

こらえきれずに
 くしゃみをしたら
 ぴすぴすと

小鳥がそれに応える
 鳴き声の下のベンチには
 手袋のように
 忘れられたまるいひと

みんなが何かを待っている
 みんなを 何かを待っている

顔の部分だけ鳥になってしまったと思ったが、
 脚も鳥っぽくなっていてちよつとドキドキした。
 その人ははつきりと肩から上だけが鳥だったの
 で同じになりたかった。

彼女は軽そうにふわりとしていた。同じ鳥で
 も軽い鳥なんだろう。私は驚のたぐいか、もしく
 は脚の太い鶏のたぐいだろうか？ 私たちはベ
 ッドの両端に立ちお互いをじつと見るだけで何
 も言わなかった。

次の日、私は自分の行方不明事件を調べるた
 めに図書館へ行った。顔を隠し太めのズボン
 を穿けば誰も気がつかなかった。司書さんだけ
 いぶかしげに目を細めた。新聞はかなりの量に
 なり重く高い山になった。私は懐かしい気持ち
 になった。鳥になってしまったのではなく、かつ
 て鳥だったのだろうか？ 新聞紙をめくる手が
 かさかさして痛い。紙で指を切り新聞紙を汚し
 た。私はその部分を切りポケットに入れた。手の
 先ももう羽の先のようにペラペラになっていた。
 私は羽の先から血を流したまま、この新聞紙の
 山へ帰っていくのだろうかと思った。

彼女のことを思った。窓の外を見ると大きな
 鳥が何かを啜えて飛び立つところだった。笛の
 ように細いもので彼女がその細い指で笛を吹く
 ことを願った。

我が家の前の緑地は金山の森という。とりたてて
 金などある兆候はない。いつかそうあって欲しい
 など願う。越して来た頃、森の散歩で近くに長く住
 むという爺様に出会った。森の名の由来を尋ねて
 みると、すり足で少し下がって、私の肩の向こうを
 指さした。振り向くと、秋の西日が火の粉になっ
 ている。

ゆつくりと、切り株に腰かけて爺様は生きる極意
 を話してくれた。逃げてはいけない。よけるならよ
 い。欲張らずに、しかしていねいに生きること。そ
 う言って、森と共振したように頭を振って頷く。川
 辺の小さな小屋で木彫をしていたが、今はどうに
 かない。

手元に爺様が彫った小さな地蔵が残っている。笑
 っているようにも見え、怒っているようにも見え、
 少しずつ爺様に似て来た。戦争で家族を亡くし、騙
 されて財産をなくして、病で足が不自由だった。ひ
 とのすべては誰かにあげるものといひ、また頷く。
 ぼくは自分の身が老いて壊れ始め、ようやくその
 記憶の意味にたどり着けた。

枇杷の好きな人で、食べた後の種を掌にのせ、黙っ
 てみていた。鳥や天使の運びきれものではない、
 そう言って種を拭くとポケットに収めた。人もい
 のちを運ぶ。

万国旗

草野 理恵子

昼過ぎに急に凍るような寒さが訪れた。そんななか、君たちは半そで姿で紐を持って立っていた。穴が激しく降った日だったから、君たちにとどこどこ穴があいていた。犬にも小さな穴が開いて動物に穴が開くのは人よりもかわいそうに感じた。

ふたりは穴のことなど気にならないように薄く笑っていた。何度もこんな日を過ごしたことがあるから平気な顔をしていた。かつて「平気な顔と平気は違うんだよ」とか「平気って兵器なんだよ」と君がささやいたことをちゃんと覚えている。君たちは空いた穴に紐を通しはじめた。赤と白の紐、ほとんどのものに穴が開いていたから次から次へと紐で結ばれていた。もう犬たちも弱っていたから黙って結ばれていた。

知っている街を自分も紐を通されて、連れ立って歩くと驚くことが多い。いつも行かない通りを穴の開いた生き物たちと歩くのは少し心躍ることだと知った。

私は靴下を売って生活をしていた。穴の開いたカバンから同じく穴の開いた新しい靴下が顔を出した。君たちはそこにも紐を通して旗のように揺らした。新品の靴下は色鮮やかで万国旗が揺れるような風景だった。はじめて犬が小さな声でほえた。

やわらかな葉

青木 由弥子

冬のあいだ大鉢に詰めておいた
茶殻や枯葉、花がらを
彼岸過ぎにひっくり返す
朽ちてこなれて黒い粒状になったところ
まだ一部に花色を残す椿
びっしり青黴の生えた蜜柑の皮
土になる前のしかばねは
網をからめたように軽くもろくまるまって
灰色のほこりを立たせている
まだらに乾いた腐土に水を打つ
掻き混ぜる
全体が黒々と馴染んでくる
再び大鉢に戻して、一日を終えた

真夜中に目が覚めた

少し開いたドアのすき間から

ほの白いひかりがあふれている

パステルで描いたような

粉っぽいひかり

いつか誰もが微塵に還る

そしてあらゆるものと混じりあい

引きあったり跳ねのけあったりしながら

新しいものへと形をなす

常夜灯、と気づくまでに

塵と崩れ流れ盡く

世界の夢を見ていた

昨夜の雨の湿りを含んだ朝の空気

昨日まで枯枝だった枝先に

白いにこ毛を光らせながら

薄緑の芽があふれている

もみじの真赤な新芽

照り返す翡翠色の椿の若葉

冬の間守り抜いた鱗片を

剥がし弾け跳ねのけ払い落とし

ひと息に吹きこぼれる春の息吹

溜めて蓄えて耐えていたものが

張りつめた膜に刺刀を当てたように

とめどなくあふれだす

気持ちの仕組みも同じか

「国」の意志も同じか

欲望の暴発を守り抜いた心の殻を

剥ぎ取った傷口から溢れ出す血膿に

肌が爛れていく

動くことも自ら働きかけることもせず

ほのかな化学物質と大気の震えで

交信することを選んだ植物たちの

あふれこぼれてなお、

傷つけあうことのない

みどり

人の消え果てた後にも

彼らは静かに生き延びるだろう

芽吹いたやわらかな葉に触れて

人であることを

ほんのひととき、忘れる